

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博士（医学）	氏名	齋 宏
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1・②項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>Indication and Usefulness of Bile Juice Cytology for Diagnosis of Gallbladder Cancer (胆嚢癌診断における胆汁細胞診の適応と有用性)</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 有 廣 光 司 印</p> <p>審査委員 教 授 田 中 信 治</p> <p>審査委員 講 師 仙 谷 和 弘</p>			
<p>[論文審査の結果の要旨]</p> <p>近年の画像診断の進歩により，胆嚢癌の画像的特徴が明らかになってきた。しかし実際の臨床現場では診断に悩む症例も数多く経験する。胆嚢隆起性病変は，肉眼的に有茎性と広基性に大きく形態分類される。Endoscopic transpapillary gallbladder drainage (ETGD)を用いて採取された胆嚢胆汁細胞診が診断に有用であるとの報告がなされているが，その適応や意義についてはいまだ不明な点も多い。今回著者は，胆嚢隆起性病変の良悪性診断における胆汁細胞診の診断能について，採取部位，採取方法，肉眼形態別での診断能を検討し，胆嚢胆汁細胞診の適応と有用性について検討した。</p> <p>2000年4月から2017年3月に，広島大学病院を受診した病変が胆嚢内に局限した隆起性病変あるいは壁肥厚を有する162症例を対象として研究を行った。</p> <p>まず，ERCで胆管胆汁細胞診の診断能を検討し，続いてETGDを留置し初回吸引細胞診の診断能を検討した。その後ETGDを用い，洗浄吸引細胞診の診断能を検討した。最後に合併症について検討した。</p> <p>最終診断は腺癌33例，腺腫10例，ADM63例，非腫瘍性ポリープ35例，慢性胆嚢炎21例だった。胆管胆汁細胞診の感度は3.6%，胆嚢胆汁細胞診の感度は59.1%であった。したがって，胆嚢癌の良悪性の診断は，より病変に近い胆嚢内から検体を採取すべきであると考えられた。胆嚢胆汁の採取方法別の細胞診の診断能は，初回吸引細胞診で感度は38.9%，洗浄吸引細胞診の感度は73.3%であった。</p> <p>形態別，採取別胆嚢胆汁細胞診の検討では，有茎性病変では全例診断できていないのに対し，広基性病変の初回吸引細胞診の感度は38.9%，洗浄吸引細胞診の感度は73.3%と上昇した。よって，洗浄を加えて新鮮な剥離細胞を得ることが重要であると考えられた。</p>			

また、今回有茎性病変の胆嚢癌では採取部位が胆管、胆嚢を問わず診断できていなかった。有茎性病変の悪性病変は全例腺腫内癌であり、悪性病変の占める腫瘍ボリュームが少ないことがその要因として考えられた。よって有茎性病変で画像所見から悪性病変が疑われる場合、ERC は合併症の観点からも不必要と考えられ、速やかに Laparoscopic cholecystectomy を行うべきであると考えられた。一方、広基性病変の胆嚢癌診断に対して胆嚢胆汁細胞診、特に ETGD を用いた洗浄吸引細胞診の有用性は非常に高いと考えられる。そのため胆嚢癌が疑われる広基性病変の症例については各種画像診断に加え、胆嚢胆汁細胞診による良悪性の診断を検討し、慎重に術式を選択すべきであることが明らかになった。偶発症は162例中で閉塞性黄疸が1例、急性胆嚢炎が3例、急性膵炎が9例、胆嚢穿孔が1例と合計14例(8.6%)に認めた。

以上の結果から、本論文は胆嚢の隆起性病変の検査、治療の方向性を明らかにした点で高く評価される。

よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士（医学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。